ぶらり なんたん ㉒

梅花の香り満ちる、日本最古の天満宮

～生身天満宮（いきみてんまんぐう）～

「谷間の霧はさながら海に似て浪かとまがふ松風の音」

学問の神として知られる菅原道真公が、秋のある朝、小麦山ふもとにあった別邸宅から私市（きさいち）（現小山西町）一帯に霧が立ち込める景色を詠んだ歌と言われています。

菅原道真公は、延喜元年（九〇一）に藤原時平らの策謀により九州太宰府に左遷されます。その際、八男・慶能（よしのり）の養育を当時の園部代官の武部源蔵に託し、「菅原のすりおく墨のいつまでもすずりの水の尽きぬかぎりは」と詠んだ歌をすずりに添えて形見としました。源蔵氏は、一日も早い帰洛を祈って道真公の木像を刻み、生祠として慶能と共に奉斎しました。これが生身天満宮の始まりで、存命中に祭祀されたことから「生身（いきみ）」とし、日本最古の天満宮と称されています。

江戸時代初期の園部城築城の際に、現在の園部町美園町に遷座され、平成十七年度に本殿が京都府指定、拝殿と秋葉愛宕神社が京都府登録の文化財となりました。

梅をこよなく愛した道真公にちなみ、早春には生身天満宮に梅の花が見事に咲き誇ります。

▲3月上旬から下旬に、梅の花が楽しめます

▲生身天満宮の拝殿（手前）と本殿（奥）

ぶらり案内人

生身天満宮
禰宜（ねぎ） 武部 昌英 さん

生身天満宮の禰宜（ねぎ）、武部昌英さんに、お話をお伺いしました。

「由緒の通り、生身天満宮は他の多くの地名の付いた天満宮とは異なり、『生きる身』であってほしいという願いが強く込められた天満宮です。現在でも、近親者のことを案じ、真摯（しんし）に手を合わせられる参拝者を時折見かけます。その姿を拝見すると、この天満宮の存在を社会にもっと伝えていかなければならないと強く思い、あらためて日々神明奉仕に精進してまいりたいと考えます。今後も末永く生身天満宮が皆さまに親しまれ、人や町が栄えて南丹市の発展につながることを願っております」

◇生身天満宮問い合わせ先 ☎(0771)62−0535

『天神さん』

天満宮は、親しみを込めて「天神さん」と呼ばれます。

道真公が太宰府で不遇な死を遂げた後、藤原時平の邸宅に雷が落ち、多数の死傷者が出ました。人々は、「道真公の怨霊が雷になられた」と恐れます。やがて、道真公は天神さまになられたという信仰が浸透し、敬慕と崇敬の念を込めて「天神さん」と呼ばれるようになりました。

『雷除け』

生身天満宮の境内でとられた青竹を用いて作られる「雷除け」。雷をよけ、雷に象徴されるさまざまな災い事が起こらないように、そして平安に過ごせるようにとの祈りが込められています。年に一度、春祭りでのみ授与されます。

『合格梅』

学問能筆の神としてあがめられる道真公。学業成就を願う参拝者も多く、生身天満宮でとれた梅は参拝者の心願成就を祈願した『合格梅』として授与されます。